

Milton's Bogy の向こう側

— ヴァージニア・ウルフのミルトン観についての一考察 —

幸 重 美津子

19世紀なかばの英国は、史上まれといっても過言ではないほど、宗教的な空気の濃い社会であった。世間に出回った本もやはり宗教色の強いものがもっとも多く、ミルトン (John Milton) の『失樂園』やバニヤン (John Bunyan) の『天路歷程』の名がこれほど多くの人々に親しまれた時代はなかったという (宮本 27-28)。ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf) の父サー・レズリー・スティーブン (Sir Leslie Stephen) は、この時代に生きた人物であった。彼はあの63巻からなる『英国人名辞典』の編集者として有名な学者である。彼の前妻はウィリアム・サッカレー (William Thackeray) の娘ハリエットで、ふたりの間には娘が一人いた。一方その美しさ故に名の知れたウルフの母、ジュリア・ダックワース (Julia Duckworth) はフランス貴族の芸術家の家系で、やはり前の結婚での3人の子供を持っていた。お互いを再婚相手としたレズリーとジュリアの間の4人の子供の3番目として生まれたのがヴァージニアである。父レズリーは子供たちへの愛情に満ちていたが、ビクトリア朝の家父長制の権化のような厳格な人であったため、男兄弟はみなケンブリッジ大学に進学したにもかかわらず、姉とヴァージニアは大学に行くことなく、すべての学問は家庭教師と、自由に出入りできる父の書斎の膨大な量の本から学んだのであった。

ジュリアは「家庭の天使」と呼ぶにふさわしい献身的な女性で、時代の求める女性の果たすべき役割を忠実に実践した、包容力ゆたかな母であった。他方、理知的であるがゆえに、ともすると悲観的になり易いレズリーは、常に妻ジュリアに心の支えと慰めを求めている。ウルフは内心、彼女がわずか

13才の時に母が病死したのは、妻としての献身が過ぎたからだと考えていた。ウルフにとっては、このような父母のイメージが、後々までのオブセッションとなっていたことが知られているが、彼女が自身の幼年時代を象徴的に描いた代表作『燈台へ』には、父の姿、母の姿とともに、母の愛を奪い取る父の傲慢に対する、子供たちの視点がよく表されている。

このようにウルフが強迫観念を持ち続けた両親の生きた時代の世相の根底を成し、またその精神世界を支えていたものとしてミルトンの教義の存在を忘れることはできない。よって本稿では概念としての父母の存在、いやむしろ、不在が大きく作用したと考えられるウルフのミルトン観を、彼が後世の女性の立場に与えてきた影響を考慮に入れながら考察してみたいと思う。

I

ウルフは生涯を通して書評活動を続け、300以上もの書評を書いたにもかかわらず、ミルトンについては意外にも多くを語ってはいない。しかしながら、彼女の作品に登場するミルトンには明らかな役割が与えられているように思える。たとえばウルフの処女作『船出』(1915)の主人公である24才のレイチェル(Rachel)は、「ミルトンを大声で詠む」恋人、テレンス(Terence)との関係が原因となった熱病で死んでゆく。

Terence was reading Milton aloud, because he said the words of Milton had substance and shape, so that it was not necessary to understand what he was saying; one could merely listen to his words; . . .

‘There is a gentle nymph not far from hence,’

he reads,

‘That with moist curb sways the smooth Severn stream.

Sabrina is her name, a virgin pure;

Whilom she was the daughter of Lochrine,

That had the sceptre from his father Brute.

The words in spite of what Terence had said, seemed to be laden with

meaning, and perhaps it was for this reason that it was painful to listen to them... Rachel... went off upon curious trains of thought suggested by words such as "curb" and "Brute," which brought unpleasant sights before her eyes, independently of their meaning. (33-34)

「ミルトンの言葉を理解する必要はない、ただ盲目的にその言葉に従えばよい」と言うテレンスの吟ずる『コーマス』の一節を聞いたレイチェルは、'curb' や 'Brute' という言葉から「抑圧」や「獣欲」といった男性の貪欲な性向を連想し、頭痛をおぼえ、その直後に発症した熱病で死んでしまうのである。

また文学の歴史小説とも呼べる『オーランドー』(1928) や『幕間』(1941) においては反対に、シェイクスピア (William Shakespeare) やポウブ (Alexander Pope) の名は登場するものの、ミルトンには何故か一度も言及されていない。おそらくは意図的に削除されているとしか考えられないのである。ウルフはそのエッセイ『自分だけの部屋』(1929) の中で 'A great mind is androgynous.' (97) とするコールリッジ (S. T. Coleridge) の言葉を引き合いに出し彼をシェイクスピア、クーパー (William Cowper)、ラム (Charles Lamb) らとともに両性具有の作家と賞賛する一方、ミルトンに関してはワーズワス (William Wordsworth) と共に「少し男性が強すぎた」(102) と批判している。ウルフのミルトンに対するイメージは、肯定的なものではなかったことだけは確かなようである。

ウルフは精神疾患を誘発する可能性があることを理由に、医者に出産を禁止されていたが、『ダロウェイ夫人』(1925) には、このような人間の精神を1つの物差で測ろうとする医師の横暴に対する批判が見受けられる¹。同様の理由で彼女は、宗教 (キリスト教) に対しても嫌悪感をあらわにしている。

Love and religion! thought Clarissa, going back into the drawing-room, tingling all over. How detestable, how detestable they are!... The cruelest things in the world, she thought, seeing them clumsy, hot, domineering, hypocritical, eavesdropping, jealous, infinitely cruel and unscrupulous dressed in a mackintosh coat, on the landing; love and religion. Had she ever

tried to convert any one herself? Did she not wish everybody merely to be themselves? And she watched out of the window the old lady opposite climbing upstairs.... Somehow one respected that – that old woman looking out of the window, quite unconscious that she was being watched. There was something solemn in it – but love and religion would destroy that, whatever it was, the privacy of the soul. The odious Kilman would destroy it. (112-13 下線筆者)

アレゴリカルな名前を持つ、娘の家庭教師キルマン (Kilman) は宗教の、というよりむしろキリスト教の象徴だと言えるだろう。主人公クラリッサ (Clarissa) にとって偽善的、独善的で、人を改宗させようとするキルマンは「人がその人自身であることを否定し、個の魂の尊厳を破壊する」という理由で嫌悪の対象として描かれている。しかしながら、ウルフは完全な無神論者であったわけでもない。クラリッサの分身と考えられる狂人セプティマス (Septimus) は公園でつぎのように夢想する。

Men must not cut down trees. There is a God. (He noted such revelations on the backs of envelopes.) Change the world. No one kills from hatred. Make it known (he wrote it down). He waited. He listened. A sparrow perched on the railing opposite chirped Septimus, Septimus, four or five times over and went on, drawing its notes out, to sing freshly and piercingly in Greek words how there is no crime and, joined by another sparrow, they sang in voices prolonged and piercing in Greek words from trees in the meadow of life beyond a river where the dead walk, how there is no death. (23-24 下線筆者)

「木には神が住んでいるので伐ってはいけない」という民間土着信仰的な要素がセプティマスを通して垣間見える。死者の歩く「閉ざされた楽園」である牧場からすすめが彼に呼び掛け、ギリシャ語で死や犯罪がないことを歌う、このイメージは筆者自身の狂気の幻聴でもあったという。また同作品に登場する太古の歌を口ずさむ老婆の姿は地母神を連想させ、“God”ではなく“Gods”に願いをかけるなど、ウルフの多神教的要素も否定できない(73)。このようにウルフにとっては、父権の象徴である一神教のキリスト教を擁護

し、ビクトリア朝時代のバイブルとも言える『失樂園』を執筆したミルトンを甘受できない理由が、奥深く、静かに内在していたと考えられるのである。

ビクトリア朝末期、およそ英国の家庭においては「家庭の天使」というイメージの女性の偶像が崇拝されていた。ウルフはイギリス婦人労働連盟で発表した「婦人の職業」の中で、女性作家としての自身の立場に触れ、その「家庭の天使」を殺さなければならなかったいきさつについて語っている（“Profession for Women” 236-38）。ウルフは書評を書こうとする時、ある女のお化けと戦わなければならなかったと言う。なぜならばそのお化けは、男性への犠牲心に富み、女性の自由な思考を妨げるものであったからである。

『屋根裏の狂女』の筆者ギルバートおよびグーバー（Sandra Gilbert and Susan Gubar）によると、そもそも「家庭の天使」というイメージは男性作家が文学に関わる女性に押し付けたものの中で、もっとも有害なものだという。

In the Middle Ages, of course, mankind's great teacher of purity was the Virgin Mary, a mother goddess who perfectly fitted the female role Ortnner defines as “merciful dispenser of salvation.” For the more secular nineteenth century, however, the eternal type of female purity was represented not by a madonna in heaven but by an angel in the house. Nevertheless, there is a clear line of literary descent from divine Virgin to domestic angel, passing through (among many others) Dante, Milton, and Goethe. (20 下線筆者)

ダンテが、早逝した初恋の女性ベアトリーチェを愛し、理想化した事はよく知られているし、ゲーテにとっては「黙想的な純潔」の規範はいつも feminine で、「重大な行為」の規範は masculine であった (Eichner 616-17)。ギルバートらによると、女性が男性作家たちにとって「神聖」であるのは、ひとえに彼女らが全く無抵抗で、完全に生産力に欠如したものと定義されているからだという (21)。このように Virgin Mary に源を発する女性の役割を、男性の「慈悲深い救済者」であり「家庭の天使」であるとする思想を後世に伝えた作家の一人がミルトンであった。そしてこれこそが、ウルフの父レズリーが母ジュリアに求め、母が娘達に奨めたものにほかならなかったのだ

る。実際、ウルフの父の思い出を綴ったエッセイ“Leslie Stephen”には、ミルトンやワーズワスの崇高な一節を、突然奇妙なリズムで詠い始めるレズリーの姿が描かれている³。前述の『船出』において「ミルトン」を大声で詠むテレンスが、レイチェルという「女性の死」の直接の原因となっていることは、ウルフの母の「ミルトンを口ずさむ父への献身ゆえの死」を考えあわせると、見のがせないシンボリズムであると言えよう⁴。

ミルトンは『離婚論』における主張に見られるように、その時代の人物としてはむしろフェミニスト的とも言える一面があったことは否定できない⁵。しかし後世の人々にとってのミルトンは、やはり聖書に於ける男性優位の姿勢を説き広め、男性のための女性の在り方を示した人物であった。『失樂園』からの一節を見てみよう。

To whom thus Eve replied. O thou for whom
And from whom I was formed flesh of thy flesh,
And without whom am to no end, my guide
And head, what thou hast said is just and right. (4. 440-43)

ミルトンによると楽園でのイブ (Eve) は嬉々としてアダム (Adam) に、「我が導き手、わがかしら、汝なくしては我が存在は無なり」と言う。

God is thy law, thou mine: to know no more
Is woman's happiest knowledge and her praise. (4. 637-38)

このようにアダムの掟は神であり、イブの掟がアダムであって、女性は男性に従っていればよいとするこのような父権の論理は言うまでもなく聖書に基づいた解釈であり⁶、ミルトン自身の主張とは必ずしも一致するものではない。実際彼は、女性の存在に関して、「神は、男性と対等な存在“rational delight”をとともにする存在として女性を創られた」と主張しているのであるが⁷、ウルフはこの点に気付いていたとは考えにくい。それどころか前述のセプティマスとそのイタリア人妻ルクレツィア (Lucrezia) に関しても、ウルフは風

刺的な一言を忘れてはいないのである。セプティマスは、道路を渡ろうとする際、妻に腕を取らせる。

'Now we will cross,' she said.

She had a right to his arm, though it was without feeling. He would give her, who was so simple, so impulsive, only twenty-four, without friends in England, who had left Italy for his sake, a piece of bone. (*Dalloway* 16 下線筆者)

イギリスに友人もなく身寄りもないルクレツィアは、ただ彼のために異国の地イギリスにやって来た。しかしセプティマスは戦争によるシェルショックのために正気を失っている。夫が妻に与えたものと言えば「一片の骨」にすぎないのだ。おそらくアダムがイブに与えた肋の骨を暗示していると考えられるこの「一片の骨」は、セプティマスが彼女に与えられるすべてだったというのである。

一方前述のエッセイの中で、世間の酷評や病に苦しんだキーツ (John Keats) らに同情の意を表しているウルフは『ある作家の日記』の中で、もし生きていたなら96歳になるはずの父レズリーの誕生日に、彼を回想して次のように書いている。

Father's birthday. He would have been 96, 96, yes, today;..but mercifully was not. His life would have entirely ended mine. What would have happened? No writing, no books; – inconceivable. (135)

これは、世間の無関心に立ち向かって詩作を続けたキーツが、自分の詩と相容れないミルトンの詩風について “life to him [Milton] would be death to me”⁸ と語ったことと呼応していると考えられないだろうか。この言葉を父に当てはめるウルフは、ミルトンをただ単に父を連想させる作家であるだけでなく、彼女の (女性の) 作家としての可能性を否定する存在として捉えていたことになる。ハロルド・ブルーム (Harold Bloom) がミルトンを「偉大な抑圧者、女性の揺籃期の鮮烈な想像力すら絞め殺してしまうスフィンクス」と表現し、またギルバートらが「男性の想像力によっていかなるものである

うと、女性の想像力にとっては、抑圧を加える父、家父長の中の家父長と全く同一のもの」(“For whatever Milton is to the male imagination, to the female imagination Milton and the inhibiting Father – the Patriarch of patriarchs – are one.”) (192)としたように、ウルフにとってのミルトンもまた、父レズリーのオブセッションと二重写しになったが故に、男性の支配者的優越の象徴であり、女性の権利を侵害しその可能性を否定する抑圧者像へと歪められていったと考えられる。

ギリシャ語やラテン語への造詣の深かったウルフは、日記の中で『失樂園』を読んだ感想として、その語法のもつ崇高さに感嘆しながらも、彼の男性中心主義的な冷やかさに疑問を投げかけている。

I was stuck by the extreme difference between this poem and any other. It lies, I think, in the sublime aloofness and impersonality of the emotion. I have never read Cowper on the sofa, but I can imagine that the sofa is a degraded substitute for Paradise Lost... He deals in horror and immensity and squalor and sublimity but never in the passions of the human heart. Has any great poem ever let in so little light upon one's own joys and sorrows? I get no help in judging life; I scarcely feel that Milton lived or knew men and women; except for the peevish personalities about marriage and the woman's duties. He was the first of the masculinists, but his disparagement rises from his own ill luck and seems even a spiteful last word in his domestic quarrels.
(Diary 5)

“Cowper on the sofa”とはおそらくクーパー (William Cowper) がオースチン夫人に依頼されて書いたソファについての詩『タスク』(The Task)を指していると思われる。ホメロスを訳し、ミルトンを編集したことでも知られるクーパーの『タスク』は神が創られたとする田園を誉めたたえ、人の造った都市の奢った頹廢を風刺している。この詩が『失樂園』の劣った代用品でしかないと思われざるほどウルフはミルトンの荘厳な詩風に驚嘆しているのは事実であろう。しかしながらその日記で見える限り、ウルフにとってのミルトンは、「結婚や女性の義務にうるさい」男性中心主義者でもあった。彼の

女性に対する「誹謗」は、ウルフには彼自身の家庭的不幸からくる悪意に満ちた捨て台詞のように思われたという。

さらにギルバートらは、ミルトンの好んだ古典語の宗教的特性にも着目する。

But not only are Greek and Latin the quintessential languages of masculine scholarship...they are also the languages of the Church, of patristic and patriarchal ritual and theology. Imposed upon English, moreover, their periodic sentences, perhaps more than any other stylistic device in *Paradise Lost*, flaunt the poet's divine foreknowledge. When Milton begins a sentence "Him the Almighty" the reader knows perfectly well that only the poet and God know how the sentence – like the verse, the book, and the epic of humanity itself – will come out in the end. (211)

ギリシャ、ラテン語はまた教会の言語であり、教父および家父長の儀式や神学の言語でもある。これを英語に当てはめることによって、彼は読者には知り得ない、その神々しい予知を誇示することもできるというわけだ。このような、女性にとって排他的とも言える宗教的背景もさることながら、厳格な学者としての父の思い出と重なるミルトンの姿はその偉大さゆえに、より抑圧的な影としてウルフの心にのしかかっていたことは想像に難くない。しかしながら、ウルフがミルトンに感じた「反発」はただ父へのそれと同一のものであったのであろうか。次の節ではウルフをフェミニストと呼ばしめるきっかけとなったエッセイ『自分だけの部屋』の中に、文学と女性をキーワードに彼女の主張をみてゆきたい。

II

「女性と文学」論、フェミニズム文学批評の古典とも評される『自分だけの部屋』は1928年ケンブリッジ大学のニューナム、ガートン女子学寮での2回の講演をもとに翌1929年に加筆刊行されたものである。「男性の2人に1人が詩歌を書けた時代に、なぜ女性がただ1人としてあの偉大な文学を書

いていないのかに疑問を持った架空の人物である主人公の「私」が、「女性が小説を書こうとするなら自分だけの部屋と年間500ポンドのお金が必要だ」(“a woman must have money and a room of her own if she is to write fiction”) (5)という結論に至るいきさつを、家父長制下の英国における女性の地位の低さと世間の女性に対する偏見の歴史を紹介しながら語るものである。以下にその内容を簡単に紹介する。

「私」は、16世紀にもシェイクスピアと同じだけの才能を持った妹、かりにジュディス (Judith) がいたとしたらという仮説を立ててみる。当時の女性に対する偏見、許されていた自由を考慮すると、早晩、気が狂うか自殺するか、村はずれの一軒家で魔法使いと罵られて生涯を送ったに違いないとしながら、実際はそのような才能を持った女性がいたとは考えられないという結論に達している。それはシェイクスピアのような天才は“not born among labouring, uneducated, servile people.” (50) だからだとしている。17世紀になって物を書き始めた女性はウィンチェルシー公爵夫人 (Lady Winchilsea) やマーガレット・キャベンディッシュ (Margaret Cavendish) ら、時間的、物質的に余裕のある貴族であって、さらにふたりとも子供がいなかったことが紹介される。18世紀になるとアフラ・ベーン (Aphra Behn) らのような中産階級の女性書き始め、女性が自分でお金を稼げるようになった。決して天才の作ではないが、彼女らなしには19世紀のジェイン・オースチン (Jane Austen)、ブロンテ姉妹 (the Brontës)、ジョージ・エリオット (George Eliot) らもまた存在し得なかつただろうとしている。なぜなら女性にはまだ伝統が欠如しており、“Masterpieces are not single and solitary birth.” (66) だからである。そして彼女らもまた誰一人として子供がなく、揃って「小説」を書いた事は決して偶然ではなかった。自分自身の部屋、自分だけの時間を持たず、家事のためしばしば思考を中断しなくてはならなかった彼女達には、せめて子供がいなく、そして、より少ない集中力で済む「小説」を書く事が作家としての彼女らにとっての条件であったとしている。その場合でも世間の因襲に敬意を払い、また世間が自分達に期待してい

るものから自らを解放すべく、性別を偽って本を書いた者たちがいた事はよく知られている。“anonymity”が美德であり、“publicity in women is detestable”⁹なのであった。

近代になり、時間的、物質的、そして精神的自由さえ得た女性たちが直面した障害は小説を書くためのツールである英語そのものにあった。つまりこの既成の英国社会が男性によって形作られ、受け継がれてきたように、英語もまた男性の使用のために男性のニーズから造り出された男性の言語あって、女性の使用には向いていないことに気付いたのである。ウルフは論理的で説明的な文章ではなく、感じたままを多少とも整理しプロセスすることなく表現する「女性の文体」をめざしていた。“a great mind is androgynous”であり、性を意識しないで書くことが重要 (“it is fatal for anyone who writes to think of their sex.”) (102) であるが、現存の、一面的な男性的英語に女性の観点を加えて、「両性具有の英語」を創造するのは女性の果たすべき仕事だと考えたのである。

この『自分だけの部屋』においてウルフは、ラムの『エリア随筆』の中でのエッセイ「休暇中のオックスフォード」(1830 *London Magazine* に掲載)を紹介している。オックスフォードでみたミルトンの詩『リシダス』(*Lycidas*)について、ラムが「どの語句であれ現在のものと異なっていた事があり得たなどと考えるだけでもびっくりさせられた」と書いていることを紹介しながら「しかしシェイクスピアは一語も変えていない」と皮肉な一言を付け加える事を忘れてはいない。そして「私」が「オックスブリッジ」を訪れたとき、その『リシダス』の原稿を見るために図書館に入ろうとすると、厳めしい図書館員がまるで守護天使のように「私」を追い返しながらか「大学の特別研究員と同伴であるか、紹介状を持っていないければ入館できない」と拒否するのである。この時「私」が見ようとし、拒絶されたのがミルトンの作品であったことにウルフが象徴的な意味を持たせたことは明らかであろう。両性具有のシェイクスピアを信奉するウルフにとって、あくまでミルトンは家父長的な男性の特権意識の象徴なのである。

伯母の遺産を手にしたという「私」は、もはや人に媚びる必要もない、安定した収入がどれほどの精神状態の変化をもたらすかに驚く。

...it is remarkable, remembering the bitterness of those days, what had money and power, but only at the cost of harbouring in their breasts an eagle ...the instinct for possession, the rage for acquisition which drives them to desire other people's fields and goods perpetually;...Indeed my aunt's legacy unveiled the sky to me, and substituted for the large and imposing figure of a gentleman, which Milton recommended for my perpetual adoration, a view of the open sky. (33-34 下線筆者)

伯母の遺産は、ミルトンが永遠に崇めよと奨めた、堂々とした男性像の代わりに、開けた空の景色を見せてくれたというのである。この男性像を崇めるという行為は、前述の『失樂園』においてアダムをイブのかしらとし、掟とした男性優位の提唱を指していることは言うまでもない。

この、空を覆っていた威圧的な紳士像のイメージは形をいくぶん変えてつぎの引用部分にも繰り返されている。つまり、男性の書いた文章を読んでいた「私」は、「I」という字に似た黒いまっすぐな棒、あるいは何か暗い影のようなもののためにその背後の景色が掻き消されていることに気が付くのである。

But after reading a chapter or two a shadow seemed to lie across the page. It was a straight dark bar, a shadow shaped something like the letter "I". One began dodging this way and that to catch a glimpse of the landscape behind it. Whether that was indeed a tree or a woman walking I was not quite sure. Back one was always hailed to the letter "I"...But...the worst of it is that in the shadow of the letter "I" all is shapeless as mist. Is that a tree? No, it is a woman.... Then Alan got up and the shadow of Alan at once obliterated Phoebe. For Alan had views and Phoebe was quenched in the flood of his view. (98-99 下線筆者)

「I」のような形の "a straight dark bar" は phallic symbol であり、前述の

男性像に匹敵するものと考えられる。男性が自らの優越性を主張しつづける男根崇拜主義的な社会において、女性の姿や意見が男性の主張にかき消されている状況をウルフは嘆く。そして未だ伝統のない女性作家たちに金銭的、時間的、物質的自由が与えられ、あと一世紀かそこら経ったなら、そして「ミルトンの亡霊 (Milton's Bogy) の向こう側」を見ることができたなら、とウルフは期待する。

...if we live another century or so... and have five hundred a year each of us and rooms of our own; if we have the habit of freedom and the courage to write exactly what we think; if we escape a little from the common sitting-room and see human beings not always in their relation to each other but in relation to reality; and the sky, too, and the trees or whatever it may be in themselves; if we look past Milton's bogy, for no human being should shut out the view; if we face the fact, for it is a fact, that there is no arm to cling to, but that we go alone and that our relation is to the world of reality and not only to the world of men and women, then the opportunity will come and the dead poet who was Shakespeare's sister will put on the body which she has so often laid down. (112 下線筆者)

すなわちウルフにとってミルトンの亡霊とは、男根崇拜主義を象徴するまっすぐな黒い棒であり、かつその背後の女性の姿を掻き消してしまう男性優位主義的見解を象徴するものであることがわかる。その背後を見られるようになったなら、その時こそ、シェイクスピアの天才を持った女性が現実となる時なのだとウルフは主張するのである。

このように、男性中心主義が文学に及ぼした影響がかくも多大であったことを例証してきたウルフは、女性のための新しい文体の必要性を認識し、男性のみによって作り上げられた一面的な英語に女性的な感性を付加することによって、両性具有の英語を完成させようとしていた。ここにウルフがミルトンを肯定できない、おそらくは最大の理由があると思われるのである。すなわち彼の語法の問題である。ミルトンの作品におけるラテン語法に基づいた英語の使用は、その、男性のみに許された言語という象徴性から、ウルフ

の目には男性中心主義の温存としてしか映らなかったことだろう。健康上の理由というよりはむしろ女性だからという理由で、大学での教育を受ける機会を得なかったウルフにとっては尚更である。キーツがミルトンの詩を指して「北方の方言にギリシャ語やラテン語の倒置や語調を無理やり組み込んだ」¹⁰と言ったように、彼の荘厳な詩風もさることながら、一方ではいわば英語の進化の歴史における時間軸を逆転させたとも考えられたのであろう。ミルトンが詩人や批評家に深く影響を与えたあの18世紀ですら、ジョンソン博士は彼の語法について“English words with a foreign idiom”と唱え、アディソン (Joseph Addison) は“our language sunk under him”と感じ、さらにウルフの敬愛するエリオット (T. S. Eliot) もまた、ミルトンの審美性を称して「机上の学問によって枯渇させ、光を失うことによって損なわれ」 (“sensuousness had been ‘withered by book-learning’ and further impaired by blindness”) 「英語を死んだ言語のよう」 (“like a dead language”) に書いた (cf. *Oxford Companion* 654) と表現しているのである。このように見てくると前述のすずめがギリシャ語で歌うというくだりは、ウルフが実際に聞いた幻聴であったにしろ、意図的な風刺が込められていた可能性も否定できないといえよう。

これまで見てきたようにウルフは、家父長制、父権の宗教としてのキリスト教、「家庭の天使」を排除し、男性によって造られた既存の文章ではなく、新しい文体の創造を目指していた。彼女にとっては、男性のみに許された学問であるギリシャ語やラテン語を重用するミルトンの masculine な言語使用は、純粹に男性の文体を使用したのではなく、意図的に、英語そのものを「退化」させ、男性優越主義を固守しようとしたのだと感じられたのだと推測できる。これは明らかにウルフが生涯求め続けた新しい両性具有の文体の創造とは相容れないばかりか、女性の可能性の芽を摘み取る「抑圧」として受けとられたに違いない。『オーランドー』や『幕間』の歴史からミルトンが完全に削除されていた理由にもこれで納得がいくというものであろう。ミルト

ンの実像が、男性と女性の対等な交わりを提唱するものであり、当時の時代背景に照らしてみれば、むしろ女性を擁護する立場であったにもかかわらず、ウルフにとってのミルトンは、父のオブセッションと二重映しになったが為に、女性を「家庭の天使」に閉じ込める家父長の象徴であり、英語と文学を男性の学問と限定する亡霊そのものであった。これは同時にミルトンを信奉する偉大な学者、父レズリーその人の姿であり、さらには最愛の母ジュリアの命を奪った、「家庭の天使」という名の、女性にとっての目に見えぬ抑圧的因襲の奨励者のシンボルだったのである。

Notes

- 1 Woolf, Virginia. *Mrs. Dalloway*, first published by Hogarth Press, 1925 (London: Granada, 1978) 89.
1911年6月8日姉バネッサに宛てた手紙の中で“To be 29 and unmarried—to be a failure—childless—insane too, no writer”と書き、結婚せず子供もいないことを気にかけてもいる。
- 2 Sandra Gilbert and Susan Gubar, *The Madwoman in the Attic* (New Haven: Yale UP, 1984) 20. おそらくギルバートらは『失樂園』でアダムとイブの属性と両者の関係について描かれた部分の中でも最も論議を呼ぶとされる第4巻295-311を意識していると考えられる。アダムは思索と勇気を表すために造られたが、イブは柔和と優美を表すために造られ、その髪は服従を意味していたという部分である。
- 3 Woolf, Virginia. “Leslie Stephen,” *The Captain's Death Bed and Other Essays* (London: Hogarth, 1950) 68. “he would burst into a strange rhythmical chant, and the most sublime words of Milton and Wordsworth stuck in his memory.”とある。
- 4 レイチェルの死んだ月は、ウルフの母ジュリアの亡くなったのと同じ5月である。
- 5 『失樂園』9巻のイヴの提案する分業論には、女性が男性をリードしている観さえある。
- 6 これは『コリントの信徒への手紙』11章「男の頭はキリスト、女の頭は男……」という言葉にもとづいていることは明らかである。『失樂園』は聖書を題材にしており、ミルトンはこのような当時の家父長制の論理に従わざるをえなかったと言える。
- 7 ミルトンは『失樂園』第8巻にあるように男性と対等の価値を認めて、実際は女性を擁護している。
- 8 Harold Bloom. *The Anxiety of Influence* (New York: Oxford UP 1973) 32.
- 9 *A Room of One's Own* 52. ジョージ・エリオットらが男性名を使って出版したことはよく知られている。
- 10 Letter to George and Georgiana Keats, 24 September 1819, quoted in Wittreich, J. A. Jr. ed., *The Romantics on Milton* (Cleveland: P of Case Western Reserve U, 1970) 562.

Works Cited

- Bloom, Harold. *The Anxiety of Influence*. New York: Oxford UP, 1973.
- Drabble, Margaret, ed. *The Oxford Companion to English Literature*. 5th ed. Oxford: Oxford UP, 1991.
- Eichner, Hans. "The Eternal Feminine: An Aspect of Goethe's Ethics," Johann Wolfgang van Goethe, *Faust*. Trans. Walter Arndt. Ed. Cyrus Hamlin. New York: Norton, 1976. (Norton Critical Edition)
- Gilbert, Sandra M. and Susan Gubar. *The Madwoman in the Attic* (New Haven: Yale UP, 1984)
- Milton, John. *Paradise Lost*. Ed. Alastair Fowler. London: Longman, 1971.
- Ortner, Sherry. "Is Female to Male As Nature Is to Culture?" Rosaldo, Michelle Zimbalist and Lourise Lamphere, ed. *Women, Culture, and Society*. Stanford: Stanford UP, 1974.
- Wittreich, J. A. Jr. *The Romantics on Milton*. Cleveland: P of Case Western Reserve U, 1970.
- Woolf, Virginia. "Leslie Stephen." *The Captain's Death Bed and Other Essays*. London: Hogarth, 1950.
- . *Mrs. Dalloway*. 1925. London: Granada, 1978.
- . "Profession for Women." *The Death of the Moth and Other Essays*. New York: Harcourt, 1942.
- . *A Room of One's Own*, 1929. Harmondsworth, Middlesex: Penguin, 1945.
- . *The Voyage Out*, 1915. London: Granada, 1978.
- 宮本昭三郎 『源氏物語に魅せられた男—アーサー・ウェーリー—伝』 東京：新潮社，1993.